

進学型総合学科高校における簿記教育の現状と課題

山形県立天童高等学校教諭 小林 勝喜

1. はじめに

本校は総合学科に移行して8年目を迎える。進学型総合学科高校としての基盤を固め、現在、その飛躍期を迎えている学校である。総合学科移行前は、普通科3クラス・商業科2クラスの併設校であった。移行後は、商業系の2つの系列（経理ビジネス・情報システム）を選択する生徒が毎年1クラス分（40名）前後で推移していた。ところが、今年度の1年次生において、商業系列の選択者が約3倍に増加したのである。「先輩の背中」には説得力がある。ここ数年の先輩方の状況や実績をみて、多くの後輩が商業系の科目を選択してくれるようになったのである。

ここでは、経理ビジネス系列における簿記教育の現状と課題を紹介しながら、進学型総合学科高校において商業教育は何ができ、何をなすべきかを考察していきたい。

2. 総合学科は第3の学科か

皆さんは、総合学科に対してどのようなイメージ

を持っているだろうか。総合学科は普通科、専門学科に続く第3の学科と言われてきた。言葉のイメージとして独立した3つ目の新たな学科という印象もある。しかし、総合学科に実際に身を置いてみると、下図のようなイメージで捉えるようになった。文部科学省のホームページにおいては、平成12年には「第3の学科」という言葉を用いていたが、直近では「普通科及び専門学科と並ぶ新しい学科」という表現を用いている。

総合学科は単一のイメージで語れるものではない。複合的な要素がたくさんあり、また、当該高校の特色によっても大きく異なる。その履修システムは大学に近いところもあり、米国の高校のそれに似ているとも言える。私自身、総合学科を何とか自分なりに理解し、人に説明できるようになるまで1年余りの時間を要した。

一般に、総合学科は「バイキング型」「進学型」「専門科目深化型」の3つに類型化できるとされている。平成6年度に制度化された当初は「バイキング型」が多数であったようであるが、最近では「進学型」「専門科目深化型」そして、「三者混合型」が増えている。総合学科というシステムの熟度が増してきていると言えるだろう。

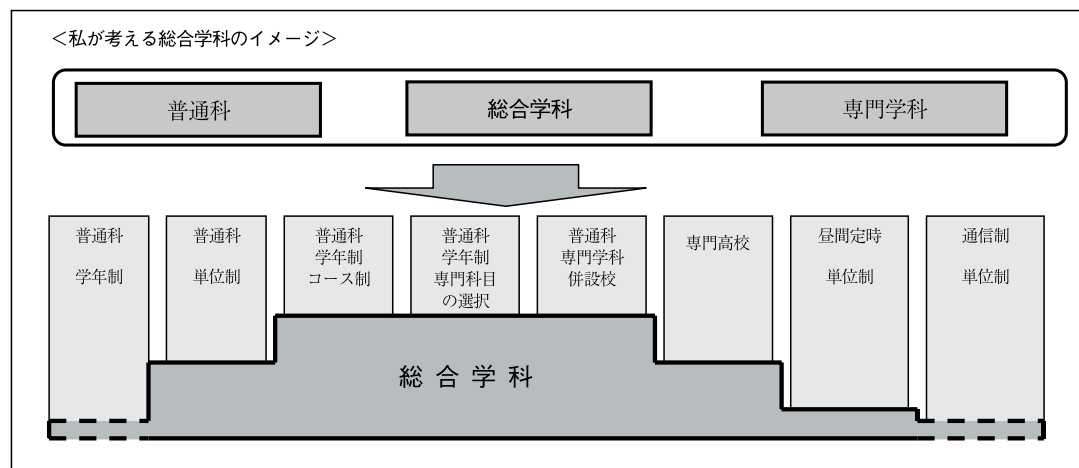


図1

3. 総合学科の特徴

総合学科の最大の魅力は、どんなタイプの学校にも対応でき、学校や生徒の特徴・実態に応じて、どのような学校づくりも可能なことである。言い換えれば、学校の目標を実現するためのあらゆる「道具」を手にするのである。その「道具」とは、単位制、少人数教育、弾力的なカリキュラム編成、そして、専門科目を選択履修できる（すべての科目を様々な形で履修できる）ことなどである。また、専門科目については、集中的な科目選択により単独校や学科設置校に負けない専門性の深化を図ることも可能である。

4. 本校の現況

本校は、県都山形市の北に隣接する天童市（人口約6万数千人）に設置されている唯一の公立高校である。地元天童市及び隣接する東根市から通学してくる生徒が、全体の2/3を占めている。両市の人口を合わせると約11万人であり、両市民から本校に寄せる期待は非常に大きい。生徒は、明るく素直な生徒が多く、生徒会活動や部活動も盛んである。各種生徒会行事は生徒が主体的に企画・運営している。部活動においても、インターハイに出場している部を中心に、熱心に活動している。また、保護者が学校を支援する活動も非常に活発である。

進路先は、おおよそ下の図2のとおりである。年々四年制大学進学者が増加しており、国公立大学への進学者も年を追って増えている。公務員試験においても、現役で国家Ⅲ種の行政事務（外務省）や税務（国税庁）、地元の市役所、郵政公社などに合格者を輩出している。今年度も現時点で、延べ40名の生徒が1次試験に合格している。また、一般企業への就職状況も

堅調である。私は本校勤務3年目であるが、この在職期間だけでも「右肩上がり」を実感できる、まさに躍進している学校である。

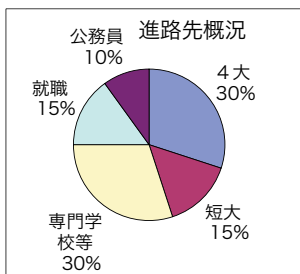


図2

本校は進路に応じた6つの系列がある。系列とは、系統だった学習をするための一つの指標である。「関連の強い学習内容のまとまり」とでも言えよう。よって、「コース」と

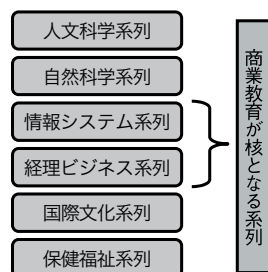


図3

は違い、系列の枠を越

えた科目選択も可能である。系列のうち情報活用能力の育成を目指す情報システム系列と会計活用能力の育成を目指す経理ビジネス系列が、商業教育が核となる系列である。なお、国際文化系列等の他系列の生徒も商業に関する科目を履修することが可能であり、実際に履修している生徒も少なくない。

5. 本校の簿記教育の特徴

総合学科高校は、一般に1年次は共通履修である。そして、2年次から自己の興味関心や進路希望に応じて科目選択を行っていく。本校の経理ビジネス系列では、下図のとおり2年次に簿記関係科目を一気に10単位履修する。よって、科目の性格上、週10単位を一人の教科担任が持たざるを得ない。教科担任として、週10単位もの時間を同じ学習集団に対して授業を行うのは、20年の教員生活のなかでも初めての経験であり、試行錯誤をしながら今日に至っている。

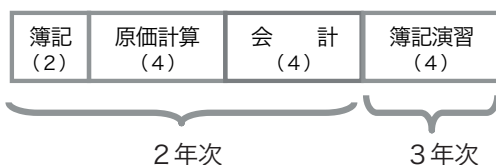


図4

学習を始めるにあたって留意したことは、昨年度の卒業生並みの進路実績を残したいということであった。履修人数は同じ15名で、うち2名が国公立大学に進んだほか、私大や県立産業技術短期大学校、専門学校等を含めた進学者が全体の8割を占めた。就職も順調であった。国公立大学については、いずれも資格を生かした推薦入学試験での合格である。よって、資格を生かした進路を実現するためにも14ヶ月後の3年次の6月までに結果を残す必要があると考えた。そこで、3年次6月までに日商2級

合格 1/3, 全商 1 級完全合格 2/3, 全商 1 級科目合格全員を目標とした。それを実現するためには、2 年次の 6 月検定で 3 級合格を果たさなければならない。簿記を学んで「たった 2～3 ヶ月で」である。そこで、急遽、春期講習で簿記講習を 4 日間実施した。そこでは、簿記への動機付けを最大の目標に取り組んだ。バラエティに富んだ 15 名の選択者であったが、この期間に簿記の概要を理解させ、併せて意欲的に学ぶ学習集団作りができたことは非常に意義深かった。

6. 集中型少人数簿記教育の特長

これまでは、検定試験の合格を目標に「突っ走ってきた」感があった。しかし、現在（11 月末）は検定を離れてもう一度簿記・会計の基礎・基本や経済社会における役割などにも触れながら、各自の進捗や理解度に応じた授業を展開している。なお、現時点における経理ビジネス系列選択者 15 名の進捗状況と検定合格状況は以下のとおりである。

＜進路状況＞

国立大	私立大	公立短大	専門学校	就 職	公務員
1	(2)	1	3	6	2

※（ ）は今後受験、公務員は国家Ⅲ種税務と郵政内務

＜検定合格状況＞

	日商 2 級	全商 1 級	全商 1 級科目合格
合格者	3 (3)	6 (5)	11 (3)

※（ ）は今後の受験者数

図 5

ここで、集中型少人数簿記教育の特長についてまとめたい。第一に、密度が濃いために定着しやすく進捗も早いということである。1 日に平均 2 時間、多い日には 3 時間授業ができる。よって、「説明→演習問題→解説→演習問題」が効率よく実施できた。「積み上げ型」かつ「手で覚える」科目である簿記にとって、集中的に多くの学習時間が確保できるメリットは大きい。また、経理ビジネス系列の基幹科目であることを否応なく自覚させられることにより、「手の抜けない」科目という意識が芽生え、学習への取組状況が良好である。

第二に、少人数のため「個に応じた学習指導」が文字通りできることである。できる生徒はどんどん先に進ませ、つまづいている生徒にはタイムリーに時間を掛けてフォローアップができる。また、複数

の学習内容（例えば、原価計算と会計など）の同時展開も可能である。一方に対して説明・解説をしている間、一方は演習問題に取り組ませるなどの方法により、進捗や理解度に応じた授業展開ができるのである。

最後に、自主的で主体的な学習集団を作りやすいという点があげられる。互いに教え合う雰囲気が自然にできあがり、放課後の学習会等も自立的であった。これは少人数教育だけが要因ではなく、商業教育や総合学科がもっている特性など、複合的な要素が影響しているものと思われる。

7. 集中型少人数簿記教育の課題

上記のとおり多くの利点を有する一方、課題も少なくない。第一に、進捗の開きが大きくなることである。40 人の一斉授業の場合は、理解度に多少の差があっても原則として同じ進捗で授業を展開する。一方、少人数教育の場合は理解度に応じた授業展開が可能となる。そうした場合、1 年後には日商 1 級範囲の学習をする者と全商 2 級の学習をする者が混在するということもあり得る。焦点をどの集団に当てるか、何を目標に学習内容を構築するかで授業展開が変わってくるものだが、今回は、進捗に大きな開きができるのは当初から織り込み済みで「個に応じた授業」を展開した。その結果、授業スタートの半年後には複数の学習内容を同時に展開する必要性に迫られ、その分、指導者の負担は大きくなった。一方の集団に会計分野の解説をした直後に、他方の集団に原価計算分野の解説をするのはなかなか大変であった。頭の切り替えがスムーズにできず、適切な解説ができなかったこともあった。また、一方に解説している間は他方は演習問題に取り組んでいるため、どこの問題でつまづいているかをリアルタイムに確認できず、目が行き届かないこともあった。このように、一人の教員が複数の授業内容を同時展開する場合は、どうしても学習内容が希薄化する恐れがある。

第二に、評価の問題である。学習内容が違うために、考査問題も違う問題を作成した。問題作成に労力がかかるばかりではなく、評価にも多くの工夫が必要となった。具体的な評価の工夫の方法については割愛するが、学習進捗に応じて評価の 4 観点に基づいた評価項目により評価した。具体的な評価方法については、事前に生徒に伝えた。この場合、最も

重要なことは生徒の「納得性」が大切であると考えたからである。

8. おわりに

(1) 進学型総合学科高校と商業教育

進学型総合学科高校のなかには、普通科単位制高校と何ら変わらないシステムに特化するあまり、総合学科設置の本来の趣旨から逸脱した取組みもみられるという。それはまさに「進学＝普通科、就職＝専門学科」という考え方から成り立っている。こうした固定的な考え方を打破するために導入されたのが総合学科なのである。制度導入の趣旨からすると、それらの取組みは総合学科としてのアイデンティティを失う行為と言えよう。

総合学科高校においては、系列の特色を生かした教育が重要である。つまり、各高校の生徒の実態（生徒の能力・適性、興味・関心、進路等）に対応するために各総合学科高校が設置した系列において、生徒各自の個性を生かした教育活動を実施すべきである。よって、進学型総合学科高校における商業教育が中心的一かかわる系列においても、その特色を生かした進学指導が必要となる。進学が普通科の専売特許ではないことを実証しなければならないのである。そのためには、推薦・AO入試のみならず、簿記や情報関係科目を利用した一般入試についての研究と指導が重要である。

(2) 「先輩の背中」

校内においては、生徒は「先輩の背中を見て育つ」のではないかと最近よく感じる。「先輩の背中」には非常に説得力がある。先輩の学習への取組状況、進路状況は後輩に大きな影響を与えるのだ。本校の現1年次生における来年度の科目選択の希望状況をみると、経理ビジネス系列の選択者が3倍弱（12名→35名）であった。情報システム系列も微増している。これまでは5クラスのうち1クラス分（約40名）が商業系2系列の選択人数であったが、次年度は2クラス分になりそうである。普通科志向と言われて久しいが、こうした選択者の増加は、生徒が商業教育に魅力を感じた証であろう。

(3) 教科商業の「ちから」

経理ビジネス系列の生徒の一人が放課後学習会を実施していたある日、ポツリとこう独り言をいったのである、「1年生のときに、何でもっと勉強しな

かったのだろう」と。彼女は、もともと学習する力はあるが、背伸びをしてまで頑張ろうとはしないタイプの生徒であった。本校に入学し、1年次は中位程度の成績で満足していた。2年次になって簿記と出会い、資格取得を目標に仲間と一緒に本気になって勉強し始めた。量・質ともに今までになく勉強した結果、簿記検定試験に合格したのは当然として、学習する習慣が身に付き、他教科科目の成績も大幅に向上した。進路決定段階になって、1年次の成績が足を引っ張っていることに気付き、少し後悔したときに出た言葉であった。このように商業教育は、生徒の意欲や学習力を飛躍的に向上させる力を持っている。

さて、本校の情報システム系列の3年次生は、2年次に全商情報処理検定2級に全員合格している。一人残らず2級に合格したということは、全員が不適応を起こさずに前向きに取り組んだ結果である。情報システム系列には、その系列の特性に魅力を感じて積極的に選択した生徒もいるが、消極的にこの系列を選択した生徒も少なくない。消極的選択者は他の系列と比較して一番多いかもしれない。中には学校や学習に興味関心が向いていない者もいた。そうした生徒たちが、全員2級に合格したばかりでなく1級合格者も多数輩出し、卒業後の継続教育を念頭にシスアドの学習にも取り組んだ。そして、本校初のシスアド合格者を輩出したのである。

わかる授業、成就感を味わえる授業がある意義は大きい。彼らを見ていると、1年次に比べて大変落ち着いた学校生活を送っており、他教科や学校生活の取組みにも好影響を与えている。まさに生徒指導の王道である。

(4) 商業教育に対する「自信と誇り」

商業教育は、将来どんな職業に就こうとも、経済社会のなかで生きていく者にとって必要となる知識・技能を身につけることができる教科である。また、商業教育はその特長の一つとして、学んでいる生徒一人一人が学習活動における目標を持ちやすく、「何のために学んでいるか」「何をどう学べばよいか」「今、学んでいることが将来どう役立つか」をイメージしやすい教科でもある。言い換えれば、しっかりとした目的意識を持ちやすく、学習に対する達成感、達成感が得やすい教科なのである。我々は、こうした商業教育に自信と誇りをもって、一層の充実・発展を目指していかなければならない。